

25年農業技術10大ニュース

雑草・鳥獣対策に成果

農水省は19日、2025年の農業技術10大ニュースを発表した。この1年間に報道された新しい技術や品種などから特に関心が高い成果を選ぶもので、1位は難防除雑草ナガエツルノゲイトウ防除技術の開発、2位はレーザー搭載ドローンによる鳥獣害対策、3位は有人監視型自動運転草刈り機が選ばれた。雑草関連が注目を集めた他、スマート技術関連も目立った。

農業技術クラブに加盟する農業専門紙など30社の投票で選ばれた。1位のナガエツルノゲイトウ防除技術

は、農研機構などが開発した。水稲の移植栽培期間中に複数の農薬で処理する技術を体系化し、2年間継続すれば同雑草を地下部まで駆除できる。農家の手

取り除草などの追加的な作業を省き、同雑草の分布拡大を防ぐ。10件のうち半数がドローンや人工知能（AI）などを活用したスマート技術関係で、昨

年に引き続き注目が集まった。2位に選ばれたレーザー搭載ドローンは、NTTイードロインなどが開発した技術で、自動で航行して赤や緑のレーザーを鳥

獣に照射する。鳥インフルエンザや豚熱などの感染源となる鳥獣を追い払い、畜産の防疫対策に貢献する。

3位のアテックスが開発した有人監視型自動運転草刈り機は、フェンスなどの囲われた場所だけでなく、オープンな場所でも安全に自動運転で草刈りできる。5位は、赤色レーザーダイオード（LD）を光源に使う植物の成長を促進できることを東京大学が初めて確認したことが選ばれた。6位には、果皮が赤色で皮ごと食べられる農研機構開発のブドウ新品种「サニーハート」、7位には動画を使って桃の木の水分状態をAIが診断する同機構の技術がランクイン。8位には、海水から肥料原料のカリウムを効率よく回収する技術の開発が選ばれた。

2025年農業技術10大ニュース	1位	ナガエツルノゲイトウ防除技術を開発 除草剤の体系処理を開発、2年間継続で地下部まで駆除が可能	
	2位	レーザー搭載ドローンで鳥獣害対策 イノシシや鹿、カラスなどで忌避効果を発揮	
	3位	有人監視型自動運転草刈り機 見守りだけの草刈り作業で労働負担を軽減	
	4位	温暖化時代の果樹適地予測マップを開発	
	5位	赤色レーザーダイオード（LD）が植物の成長を促進	
	6位	ブドウの新品种「サニーハート」が登場	
	7位	桃の木、AIが水分状態を診断	
	8位	海水から肥料原料を確保	
	9位	DXでライスセンターのスマート化	
	10位	大豆、根粒菌共生系で温室効果ガス削減	

（出所：農水省）

（藤平樹）